

「コリント教会へのパウロの手紙」のポイント

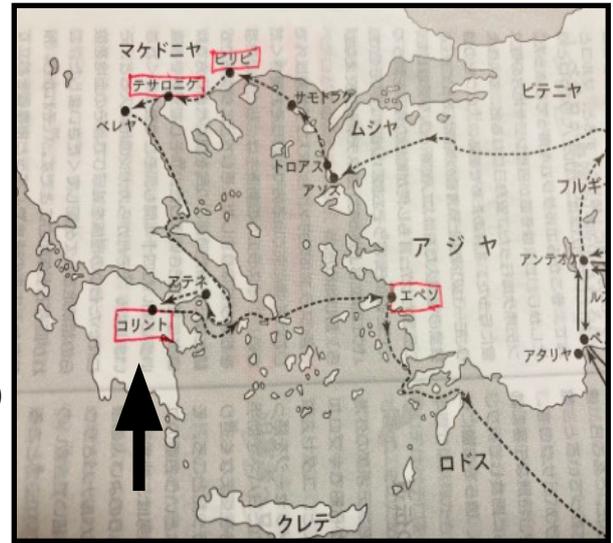
1 コリント教会への手紙のアウトライン

A：教会の問題についての対処

- (1)教会の分裂について(1章10節～4章21節)
- (2)教会の無秩序な状態について(5章1節～6章20節)

B：教会の質問に答える

- (1)クリスチャンの結婚に関する教え(7章1節～40節)
- (2)クリスチャンの自由に関する教え(8章1節～10章33節)
- (3)礼拝に関する教え(11章1節～14章40節)
- (4)復活に関する教え(15章1節～16章24節)



「コリント教会へのパウロの手紙」を読んでみよう

1 今日の聖書箇所：11章1節～16節

2 今日のポイント：福音の本質を大切にすることと伝統や習慣

(1)前回までの復習

パウロは10章の後半で、捧げ物をする行為について述べました。捧げ物については8章で、何の影響もないので、食べる事も可能としましたが、ここでは、捧げ物を捧げる行為については、偶像礼拝にあたるとして厳しく警告しました。当時のコリント教会のモットーは「自由」でしたが、コリント教会のクリスチャン達はそれを「何をしても自由」だと履き間違えていました。創造主の前に正しい姿で生きる事から外れつつあったのです。パウロは主の前での自由と、与えられた自由を自分の利益の為ではなく、他人の益の為に用いるようにと語りました。

(2)女のかぶりもの(1～11節)

聖書を読む時には、その時の時代背景を知らないと、理解できない箇所があります。今回の11章もその一部だと言えるでしょう。4節～7節に記録されているように、コリント教会内部では「女性のかぶりものをかぶらない」や「男性がかぶりものをかぶる」問題がありました。当時の文化や慣習では、女性がかぶりものを着けないで集会や人の集まりに出ることは「性的な誘惑をする」という事を意味しました。また実際に、かぶりものをしなかったのは娼婦か遊女だけだったようです。そのような格好で礼拝に来ると、礼拝の場ば騒然とし気が散って礼拝どころではなくなってしまい、女性自身のためにもまた礼拝に参加している人々の益にもならない事でした。また、逆に男性がかぶりものをかぶる事も、会衆に大きな混乱をもたらしました。はっきりしたことは分かっていませんが、このような慣習や聖書の記述から、カトリックでは女性がミサに参加する時にはベールを被るように求められるとされる学説もあります。

いずれにしても、福音は変わらないものですが、時代によって変わるものもある中で、福音的な本質

に大きな影響を与えない部分に関しては、当時の状況や文化の中で、礼拝に混乱をきたさないようにすべきだとパウロは考えたようです。

また逆に、福音の本質を変えない範囲で、教会も時代や集まる人々の年代や背景・文化に応じて、変化をするべきだと捉える事もできます。考えてみると、初代教会、中世時代の教会、近代の教会など時代を経ても変わらない福音の本質と、変化する礼拝様式などが挙げられます。その時代に生きる人々に、どのようにすれば福音が伝わるのか、どのようにすれば心から礼拝できるのかを常に考えていく必要があるでしょう。

(3)男女は平等(11～16節)

パウロは、11章の6節～10節の中で男女の秩序について語りました。それは男尊女卑のような考え方を伝えなかったのではなく、男女は本来、異なった存在として創造されたので、その主の秩序の中で生活を送るべきだと語りたかったのです。ですから、パウロは11節で「相互に依存し合っているだけでなく、人間は男も女もすべて創造主によって造られた者たちである。」と語りました。創造主にとっては男も女も同じように創造された大切な存在であるので、その2つの異なる存在が、何の支障も混乱もなく、礼拝に参加し、創造主を礼拝できるように、当時の文化の慣習に従っていく事をパウロは説いていたのです。

3 分かち合ってみましょう

どんなに時代や社会環境や国が変わったとしても、教会が変わってはならないものがあります。それは聖書を判断基準に信仰基準にする事です。一方で、礼拝の方法や方式、伝道方法や福音を提示する形は、時代に合わせて変わってきました。教会創立から長い年月が経つと福音はそのままですが、そのほかの事柄も変わらず、その時代の人々に合わせた福音提示、礼拝方式、教会文化が形成できず、時代に取り残される教会(もしくは、その時代の人々を福音へと導くことができない教会)へと変わってしまいます。

私たちは変わらない福音を、これからもこの世界に提示し続けるために、どのような部分は変化してはいけないのか、どの部分は変化できるかをいつも考えながら信仰生活を続けなければなりません。